

優秀賞

大学生部門

広島大学 4年

長内 綾乃

空気を吸い込む

大学生になってよっ友が増えた。挨拶はするけど、一緒にご飯を食べるような仲ではない。高校生の時は教室があつて、自分の席があつて周りに友達がいて、お昼ご飯と一緒に食べるというのが当たり前だったので、かなりショックを受けた。息が詰まるような気がしていた。下宿をしていることもあり、ちゃんと話せる友達を求めていた。

状況が変わってきたのは2年生の冬からだ。バイト先の子と仲良くなった。お互い学部で生きづらさを感じていた。似た者同士であつたため急速に仲良くなっていったが、私は自分の本心を隠し、どこか上辺だけの付き合いで逃げていた。友達だと思つていてもどこかで悪口を言われているかもしれないと怖かった。学部の友人たちと深い付き合いをしないのは過去に悪口を言われたのを聞いてしまったからだ。月日は流れ、その子は就活のためにアルバイトを辞めて次第に疎遠になった。辛かった。上辺だけの付き合いをしていた自分をぶっとばしたくなった。

その子の就活が終わつて一緒にお酒を飲んだ。2時間くらいを予想していたけど、気がついたら5時間も話しこんでいた。お酒も進み、お互い本音を言い合つていた。「ありがとうとごめんなさい」を言うタイミングが好きだと言われた。自分がここだという時にありがとうと言つてくれるのが好きだと。でも上辺だけの付き合いをされているのは彼女も気づいていた。「私が百でぶつかるから、百で返して欲しい。逃げるな」と言われた時に私は、人に理解してもらつたことこそが、自分が生きていると感じる時なのだと思つた。他人という鏡に反射して自分が映しだされる。周りの人を通して自分が作り出されることは純粹なうれしさが伴うのだと思つた。周りの空気ばかりを気にするのではなく、目の前にいる人に対して誠実になることが大切だと教えた彼女は今でも大切な友達だ。空気は読むのではなく吸い込むものなのだ。